
しろいさかな

からたちみかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しろいさかな

【Nコード】

N1347D

【作者名】

からたちみかん

【あらすじ】

金木犀の香と、大好きだった部長。気がつけばあたしはすすき野原に立っていた。

金木犀の香りが漂っている。

見上げれば上弦の月。夕暮れ時の雑踏は慌しく人々が行き交っている。私は街路樹として植えてある金木犀の木の下にいた。

金木犀の元に設置された木製の椅子に私の大好きな部長が腰かけていた。会社の上司で私は誰よりも部長を尊敬していた。

大好きだった。

部長は感情を押し殺すように俯いていた。

よれよれになったスーツ。疲れきった表情と部長らしくもない無精髭。歳相応かそれ以上に見える。

普段は『若いヤツらには負けない』と、外見も行動も気を使っている部長がこんな格好をさらすなど、考えられなかった。

部長は虚ろな表情で顔を上げた。私を通り越して部長が見上げていたのは上弦の月。

不意に部長は金木犀の幹に軽く頭を打ちつけはじめた。その度に金木犀の黄色い小さな花がハラハラと落ちて部長の髪にくっつく。部長はそれすら気づいていない。

「髪の毛に金木犀がついていますよ」

笑いながら私は部長の髪についた金木犀の花を払おうとした。私の手を部長は避ける。

見上げる漆黒の瞳。

悲しみに満ちた眼差し。

「ごめんなさい」

バツが悪くなっ行って行き場を失くした私の手が宙を彷徨う。突然、部長は立ち上がった歩き出した。

「待ってください」

私は部長の背中を追いかけた。早歩きでついていくのがやっとだった。私は必死になって追いかけたのに。

どうしても追いつくことが出来なかった。

風の吹く場所にいた。すすき野原が広がっている。私はたった一人でその場所に立っていた。西に傾きかけた空。黄昏の色。赤い夕焼けの中で青く水のようにピンと張った空気。夕焼けに染まった橙色の雲。

私はこの場所を知っている。

その雲の中に一際白い雲の群れが真ん中に渦を作っていた。不思議に思つてよく見ればそれは雲ではなかった。

しろいさかなだった。

白く半透明な魚たちが空へ昇ってゆく。

琥珀色の光に向かって。

螺旋を描き。

「しろいさかな」

私は呟く。

「ああ、そうか」

私はぼんやりと想う。

部長は憧れの人だった。

あれは去年のことか。部長とふたりで残業していた時、勢いで言ってしまった。

「私、部長のこと好きです」

まるで告白のような一言。

「おいおい、大人をからかうんじゃないよ」

照れたように部長は笑っている。

「お父さんみたいで」

付足すと部長は苦笑いした。

「お父さんねえ。俺、そんなに君のお父さんに似ているの？」

「会ったことないからわからないです。部長みたいなお父さんがいない、て。憧れです！」

「憧れねえ……」

「はい」

私は満面の笑みで頷いた。部長は小さく「そうか」と、答えた。どうやら部長は何となく事情を察してくれたらしい。離婚か死別か。多分どちらかだと思っているのだろう。

「さ、終電前に仕事終わらせて帰るぞ」

「はい」

部長はさりげなく話をそらした。私も父親がいない理由を深く言うつもりはなかった。曖昧にして話を終わらせればそれですむハズ、だった。

終電に間に合うよう仕事を片づけたその晩の帰り道。駅まで部長とふたりで肩を並べて歩く。会社から駅までは徒歩で十分程度だ。暗い夜道。すっかり冷え込んだ街は金木犀の香で満たされていた。

「金木犀の香りすごいですね」

私は秋の深まりを感じて何だか嬉しかった。季節の中で秋が一番好きだった。

「トイレの匂いだな」

「そんなロマンもへったくれないと言わないでくださいよ。もう」

「俺らの世代は芳香剤といえば金木犀だったからな。そのイメージが強くて、な」

「部長の世代ですと、ね。今は金木犀の芳香剤なんてないですよ」

「だよな」

私の嫌味に部長は乾いた笑いを浮かべる。

「私は金木犀の香、好きですよ。子供の頃、住んでいた家に金木犀の木があつて。今でもこの時期になる見に行きます。今は誰も住んでいなくて廃墟と化していますけどね」

「へえ」

母とふたりで過ごした子供の頃。懐かしくて切ない思い出は金木犀の香によって蘇る。

「物心ついたときから父親はいませんでした。死んでいるのか生きているのかわかりません。母に聞くのがこわかった」

どうして私は部長にこんな話をしているのだろう。部長は歩きながら話をしている私を見下ろしていた。どこか悲しそうで、それなのに優しい眼差。決して同情をしている色ではない。部長は私の話に耳を傾けている。

「お父さんが欲しくてたまらなかった。子供の頃、もしもお父さんがいたら。いつも想像していました。学校の先生や、テレビの特撮のヒーロー。アニメの主人公。」

こんな人たちがお父さんだったらいいのに、て。おかしいですよ。ね。お父さんいないのに。私ファザコンみたいです」

私は微笑んで部長を見上げた。つもりだった。目頭が熱い。気を抜けば涙がこぼれ落ちそうになっていた。そんな姿を部長には見せたくない。私は必死に涙を堪えた。気を取ら立ち止まる。私は泣くまいと必死だった。

影に気づいて見上げると部長が目の前に立っていた。部長の背後に見えた下弦の月がぼやけている。月だけじゃない。部長の顔もぼやけて見えた。部長は何も言わずに私の頭を撫でた。とたんに涙が溢れ出す。

「泣きたい時は泣いていいんだぞ」

そこにいたのは部長ではなく、確かに『お父さん』だった。憧れてやまない父親だった。

あたたかくて大きな手。

私が望んだもの。

「はい……」

私は何度も頷いた。

私は幼子のように泣き続けた。

誰もいない古い廃屋。夕暮れの景色の中。金木犀の香りが色濃い。部長は金木犀の前に立ち尽くしていた。私は部長の背中をじっと見つめている。

そうだ、ここは。

私が子供の頃、母とふたりで暮らした長屋だった。

部長は金木犀を見つめていた。

どうしてここに？

覚えてくれていたのだ。

あの時のことを。

私は嬉しかった。

部長がこの場所に来てくれたことが。

部長は泣いていた。ボロボロに泣いていた。声を押し殺して泣いていた。こんな姿をはじめて見た。

泣いている理由を私は知っている。

計らずとも部長は私のために泣いている。

そう思うと胸が痛む。

「ありがとうございます」

聞こえないのに。

見えないのに。

言って私は部長に頭を下げた。感謝の気持ちでいっぱいだった。

私はすすき野原に立っていた。風が吹くすすき野原でしろいさかなを見上げていた。

それにしても。

私は私を苦笑した。

最後の最後だというのに。行きたかったところが部長の所だったのか、と、驚いていた。実の母でもなく。恋人でもなく。友達でもなく。父親代わりに憧れた部長の所だった。

「どんだけ」

流行の言葉を口にして私は呆れて笑った。

「死んでもお父さん。か」

どうして死んだのかよく覚えていない。こんなに若くして死んだのだから交通事故だろうか？ 私は他人事のように思った。

私は生前からこんなに能天気だったのだろうか？ そうだったよ
うな気がすればそうでもないような。死んでしまうと執着心がなくな
ってしまうのだろうか？ 仕方がないとあきらめて。

不思議と悲しいとか悔しいとか。思っていないかった。思い残すこ
とはたくさんあったけれど、清々しいような気がした。

私はしろいさかなを見上げる。

気がつけば私は、しろいさかなになって空へ、琥珀色の光へ向か
って昇って逝く。

「今度生まれ変わる時はお父さんがいるウチの子供がいいな。お父
さんに甘えてみたいな」

そつと呟いて私は眩い光に包まれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1347d/>

しろいさかな

2010年10月8日15時08分発行